

## 序論

### 第1章 研究の目的と方法

#### 第1節 研究目的

本研究はフィリピンの首都マニラの都市空間を通して、フィリピン社会が抱える問題点と都市空間との関係性を探るものである。それは都市がもつフィルターとしての機能がフィリピン社会の問題点を顕在化することと関係する。またここでいう都市のフィルターとしての機能とは潜在化しているものを社会の表層に浮かび上がらせることであり、すでに普遍化している事実をもとにフィリピン社会に表面化しているものを再認識し、権威付ける作業ではない。

今日のフィリピン社会を見つめる際、スペインとアメリカによる400年を超える植民地支配の歴史がもたらす制約を見過ごすことはできない。本研究を行っていく上でも不可欠な事柄である。その歴史は「外部の支配と洗脳、抑圧と搾取によって、フィリピン独自の内在的な発展を妨げられ、可能性を奪い取られた、いわば痛恨の過去（清水 1998: 149）」として捉えられている。人々に内在化したこの認識は国民国家成立後の今日にもなお存在するものであるが、一方でフィリピン・ナショナリズムを基盤として、奪われた「過去」に回帰するだけでなく、別の姿を「未来」に構想する動きが発生していることも事実である。それは切り離すことの難しい植民地の歴史を踏まえつつも、過去の様式、遺産といった表層的なものの現れ方のみを終始することではなく、都市から発生し発展している今日のフィリピン文化の探求ともいえる。しかし、フィリピンへ足を運んだ経験のある方なら推察できるだろうが、フィリピン国民の約半数を占める「貧困層」に分類された大衆には上述したような積極的な思想はなく、日々の生活に圧迫されている状況下にある。夢や理想を追い求め、精神的な満足感を得るために社会に身を投じている者はほんの一握りである。

こうした貧困層が都市の下層で膨れ上がっている状況において、彼らの存在はどのような形で社会現象となり具現化されているのだろうか。

この問題に対する一つの切り口として考えられることは「面」として残るスペイン、アメリカによって計画されたマニラではなく、「点」として存在するマニラの街角、「盛り場」といった喧騒とした都市空間である。マニラを歩いてみると見慣れない光景が数多く現れてくる、私たちはこれらの表面的な多様性の一つ一つに独自の価値を見出すこともできる。また都市空間を構成する一要素である大衆の行動ですら我々の日常からは想像し難い現れとなって出現しており、我々の文化とは異なる価値感で彼らの行動を見つめることができる。これらの集合体を形成している空間が「盛り場」である。しかし、本論で考察したいことは都市の多様性、つまり、物珍しいものの羅列ではない。都市空間「盛り場」が、社会問題の顕在化に務める潜在的な能力を持つ可能性を模索することがこの研究における趣旨である。

「盛り場」の発生、地理的配置、またはモニュメントとしての役割を果たす建築物と人々との関係の考察により今日のフィリピン社会が抱える問題点を提示し、その噴出口となり可視化することのできる都市空間「盛り場」との関係性を考察することを本研究の目的とする。

#### 第2節 先行研究

今日都市をめぐる議論は複雑に入り組んでいる。巷に溢れ返る“グローバル化”、“多様化”といった言葉はこの複雑さに更なる拍車をかけている。「都市は有機的かつアメーバ・状に変化を遂げている（田島 2002: 6）」という田島の言葉は数多くの情報、手段を媒体として煩雑に繁殖し続ける都市の姿を描写した明解なたとえであると思われる。

確かに、本来私たちが抱く都市イメージはその空間の雑然さ、時代の最先性、また様々なモノ、人が集中した文化的空間である。一昔前のように「都市」対「田舎」という二項対立的な議論をすることは前述した今日の都市状況ではもはや不可能といっても過言ではないが、それでも都市は情報やものや人々が氾濫した状態で成長を遂げていくものである。ただ、変化したことは1990年代以降顕著になった情報技術の発達を軸にして展開されたグローバリゼーションの影響による移動、伝達速度の更なる加速化である。都市というものはそこに住む人々を介して存在しており、それが当然のこととして考えられるであろう。しかし、グローバリゼーション以降は都市に出ることなしに都市を体験できるようになり、（つまり、インターネットを使った買い物やEMAILの普及などにより人との直接的な接触無くして生活できるようになっている）、急速に都市と都市、人と人との距離が接近してきている。モノが接近すれば変化が加速することは至極単純な結果である。私たちが体感している加速する都市の変貌は、今まで味わったことの無い都市の姿となって表出しているのではなかろうか。

わたしは都市の姿、つまりあらゆる要素、問題、事件などが内在的、あるいは顕在的に認識された状態、を研究しようとした際、今日の都市を支えてきた過去の都市の姿が問題となって浮上してくる。また、それらは先達の手によってどのように語られ、研究されてきたのであろうか。

そこで、以下では 20 世紀における都市研究を概観し、過去にどのような問題点が指摘され、それに対してどのような方法論が適応されてきたかを考察しておく。

都市を研究対象とするアプローチの方法は多種多様である。都市が複雑に入り組めばそれに対応して方法論も増えてくる。しかし、数ある先行研究もいくつかの分類に区分することができる。吉見は著書『都市のドラマトウロジー - 東京・盛り場の社会史』の中でその方法を以下の 4 つに分けて考えている。

- 1, 都市の文学研究の側から試みられたアプローチで、都市 = テキストを文学作品 = テキストの分析を通して描き出していこうとするもの。
  - 2, 直接都市を自分の足で歩いて回り、その体験を言葉にしていくことを通じて都市 = テキストを読んでいこうとする、ルポライターや作家、写真家等によるアプローチ。
  - 3, 主として建築の領域で展開されてきているもので、都市の建築や街区の構成空間、あるいは壁面形態をテキストとして記号論的分析の対象としていく。
  - 4, 主に社会史の領域で展開されてきているアプローチで、都市を民衆の群れ集う祝祭的な空間として捉え、そこにおける結集化の契機を探っていくもの。
- (吉見 1987: 8)

吉見の分類による都市分析の方法はどれかひとつを取っても成立するものではなく、それぞれが絡みあって共存している。一見互いに異なるこれらのアプローチではあるが、ある一点で共通している。いずれの場合も都市に出て、彷徨したときに目に入ってくるモノから、都市や社会を捉えていこうとするスタンスをとっている。それは「テキスト論」的に都市が「記号学的分析の対象」になっていることの現われと言い換えることができる。

都市を分析する視点の一つとして記号論<sup>1</sup>を持ち出すことが可能である。しかし、記号学が隆盛する以前、20 世紀初頭に行われたシカゴ学派による都市研究では都市社会学の古典ともいえる研究が既に行われていた。以後記述する記号論的アプローチと比較するとシカゴ学派の取り組みは表面的な物質空間にとどまらず社会集団のライフスタイル、人々の交流の様子を含めたエスノグラフィーの創出に努めた点で対照的な立場に立つ。しかし、シカゴ学派の都市研究の視点は「都市の逸脱者の世界に目を向け、その文化のダイナミズムを重視(成実 2001: 23)」しているが、支配的な文化の権力を批判する視点はなく、それを含めた都市研究は後世に委ねられている。

一方、都市の記号論は「1960 年代に K・リンチや R・バルトが都市記号論を準備し、70 年代にコンテクスチャリズム論<sup>2</sup>が語られ、80 年代は学際的な都市テキスト論が興隆し(五十嵐 2000: 112)」90 年代に入るとそれまで流行していた都市論ブームは平行線を辿り、むしろすべての問題を記号としての都市、建築という表層的に static な状態から下層的に dynamic な状態に深化させようとするムーブメントが起こってきた。

この 90 年代的都市論の潜在性を逸早く察知し、新たな方法論として提示したのが吉見俊哉である。その他にも 80 年代の都市論の問題を継承し、その問題意識と方法を発展した分野としては情報社会論、メディア論を受けた「メディア都市論」とカルチュラル・スタディーズを受けた文化研究的な都市論をあげることができる。

しかし、この都市 = テキストを論者の恣意的なグルーピングによって分類したならば、そこに生まれる都市は本当に記号化された無機質な都市になってしまう。このような「都市 = 読まれるべきテキスト」という我々の一方的なテキスト論的解釈は都市の問題を機能の淵に追いやるのみで、都市の根底を支える私たち自らの存在を無視するものである。この懸念に対して投げられた吉見の方法論はテキストとして取り込まれた建築、大衆を都市を劇場とする舞台に立たせ、「演じる = 演じられる」関係から都市の磁場形成を支える大衆のエネルギーを導き出した。

上述した都市研究の系譜は 1990 年代までのものである。言うまでもなく都市は現在進行形で成長し、増幅しているものである。しかし、この状況に対して確立された方法論は少なく、今日の状況はその方法論自体の模索期にあたり、ある種実験現場の様相を呈している。

私は本論文を書き進めるにあたり多くの先行研究から示唆を得た。その中でも 1980 年代後半に行った吉見俊哉の東京の盛り場研究は本論文を構成する上での方法論となっている。次節ではこの吉見の方法論を概観し、本論文への転用、そして展開を見ていく。

### 第 3 節 研究方法

前節で既述しているように、都市論を語る際の方法論は、その多くが都市の多彩さに導かれた表面的な多様性にもかかわらず、都市を「読まれるべきテキスト」として捉える点で共通の地平に立っている。一方、これらの都市研究の系譜はその方法が隠蔽する恣意的な都市解釈に対する問題提起となって立ち現れてもいる。吉見はこの問題に対して(1)意味作用の主体への問い、すなわち都市

を生きることでそれをひとまとまりのテキストへと織り上げていく人々の相互媒体的な身体性への問いと(2)意味作用の場への問い、すなわちそうした相互身体的な諸身体を取り巻き、布置し、組織している場のトポロジカルな編成への問い、を発見している。そして彼自身の問題に対する都市の解釈方法は「盛り場」というキーワードを伴って提起される。この方法論は記号論の地平において見過ごされていた都市のダイナミズムに焦点を当てている点でシカゴ学派の研究と共通の視点を有している。一方で、社会の下層に生活する人々と、権力者との構造に焦点を当てつつも二元論を回避するかのように「盛り場」の入り組んだトポロジーの生成原因に都市の多元的な姿を求めている点はシカゴ学派が支配者の権力を追及したのみに終始した研究と大きく異なっている。

本研究では前述したような都市研究方法に基づき、フィリピンの首都マニラの「盛り場」を研究する。多くは文献研究の側面を持ち合わせることになるが、筆者が行ったマニラ調査の視覚資料も合わせて提示していく。以下は本論の大まかな構成である。

序論：本論の前提となるマニラの都市史を概観する。そして本論で扱う「盛り場」の定義をし、最後に調査対象地区内における「盛り場」の分布を記す。

本論：まず具体的な対象として教会、ジープニーのターミナル、郊外のショッピングモールに焦点を当て、その周辺の様子を記述する。そして、これ等の場所から共通して得られた寄生空間としての「盛り場」を抽出し、フィリピン社会、または社会問題との相互性を指摘する。

結論：これまでの論を再確認しつつ、「盛り場」をフィリピン社会の縮図としてとらえ、社会問題の噴出口としての機能を持つ都市空間と位置付ける。

## 第2章 マニラ都市の様相と「盛り場」

### 第1節 マニラ都市の歴史

マニラの歴史はスペインの植民地政策により加速した。16世紀初頭までは小さな漁村に過ぎなかったマニラが植民地の首都としての礎を築かれてからは都市の歴史が「フィリピン」の歴史とも言えるほどマニラを中心に様々な出来事が起こった。そこには植民地支配が及ぶ範囲における中心的な都市として重要な役割を担っていた性格が見受けられる。

植民地統治が開始されてから今日に至るまでの再三に及び他国からの支配、そして独立という周期はアジアの中でも異彩を放っている。その影響は過去の宗主国に強い文化の一部として現存しており、今日「多様的」と言われる文化的特徴の一端を担っている。この多様性を巡る議論は単に文化的特徴として甘受されるだけではなく、ポストコロニアルの観点からの批判的な境が開拓される必要がある。フィリピンに見られる多様性を言及した視点は、都市空間を巡る議論においても、ポストコロニアルの概念を回避することなく、研究が行われる必要がある。こういった理由からも歴史を回帰することは必須である。特にスペイン支配が開始された16世紀以降の歴史は、今日のマニラの都市形成において表面的にも、潜在的にも重要な関係を示している。以下では都市空間の創出が時代を投影する形で行われる側面を考慮して各時代ごとのマニラ都市史<sup>1)</sup>を概観する。

#### 【スペイン統治期(1565~1898)】

現在のフィリピンがスペイン人により「発見」されたのは1521年であった。フェルディナンド・マゼラン(Ferdinand Magellan)はモルッカ諸島への航路探索の途中サマル島の岸にたどり着いた。その後、1525年、1527年、1542年の三度に及びフィリピン諸島植民地化のための遠征は失敗に終わったものの、1565年ミゲール・ロペス・デ・レガスピ(Miguel Lopez de Legaspi)に率いられた遠征隊はセブ島に上陸しフィリピン最初のスペイン居留地を築いた。さらに1571年には後の植民地政府の拠点となるマニラを平和的に占拠した。

マニラの都市計画は、新世界においてスペイン人により設立された諸都市、たとえばイスパニョーラ島のサント・ドミンゴと同様の原理に基づいていた。街路は直線的に引かれて直角に交差し、土地はチェス盤のように同じ広さに区画された<sup>2)</sup>。レガスピはマニラの中央広場を最初の教会、のちの大聖堂の前にとり、教会の南側には市庁(カピルド)とその向かいに政府の建物を配した。これがイントラムロスを形成していく起点となるプランである。さらにレガスピは修道会のために土地と王立病院のための区画を確保したうえで、残りの土地は兵士に分け与えた。当時のマニラはサン・アントニオ地区、湾に面するサン・カルロス地区、内陸に面するサン・ルイス地区とサン・ガブリエル地区の4つの区域に分けられた。

16世紀から18世紀のマニラの歴史は度重なる大火事と震災、そして異国からの侵攻<sup>3)</sup>の連続であった。しかし、これらの災害からの復興はマニラを発達させる要因になった。この過程において天災からマニラを守るための建築材料、建築工法といった新技術が改良され、強度と耐久性に優れた城塞都市へと変化していった。その結果、マニラには人口が集中し、都市の発達は広く認められるようになり、イントラムロスには王宮や教会、修道院など豪華な建築が建ち並び、「東洋でもっとも美しく、卓越した、スペイン国王の街(サラゴース 1996: 22)」と評された。要塞都市イントラムロス(Intramuros)の大きさはその後不変であり、0.62平方キロメー

トルの城内に東洋と西洋が刺激的に調和していた。一方で、マニラは城壁の外側に向かって半円状に発達し始めた。パシグ川の反対側にはトンド地区、パイパイ地区、川に向かって同じ側にはエルミタ地区、マラテ地区などが形成され、パシグ川の上流方向にはキアボ地区、サン・セバスチャン地区などが形成された。更に郊外にはマカティ、パサイといった地区も発達していった。

#### 【アメリカ統治期（1898年～1946年）】

1898年、キューバでスペイン人によりアメリカ船メイン号が撃沈されたことを契機に米西戦争が勃発した。同年マニラ湾の戦いにおいてスペイン艦隊はアメリカの鋼鉄製艦隊に完敗し降伏した。合衆国による軍政は1898年に開始され1901年には民政に移管された。1901年から1935年まではアメリカ人総督が合衆国大統領より任命され統治していたが、1935年から1946年までの間はフィリピン=コモンウェルス<sup>34</sup>政府発足し、10年以内の独立が約束された。

アメリカ統治期には、フィリピンに新しい都市計画の考えもたらされた。シカゴの著名な建築家、および都市計画化のダニエルバーナム（Daniel Hudson Burnham）とピアース・アンダーソンがマニラのマスタープランの立案を依頼された。バーナムはイントラムロスの歴史的な価値を尊重し、中世の城塞都市の数少ない保存例として、外側の城壁のごく一部を交通用地として取り除く以外はイントラムロスをもそのまま残すことにした。又バーナムは政府新庁舎群の開発プランも策定している。堀は衛生上の理由から埋め立てられ公園に変わった。又、バーナムはルネタ公園からカピテまでのモニュメンタルな海岸通りを計画し、この海岸大通りはデューイ通り（現在の口ハス通り）として知られるようになった。有名なマニラホテル、陸海軍クラブ、エルクスクラブなどの社交施設の計画も彼の手によるものである。バーナムのマスタープランを嚆矢にマニラは近代的な都市へと変貌を遂げた。その影にはアメリカ人建築家、都市計画家だけでなく、フィリピン人建築家の成長もみとれる。彼らの努力により小さな集落だったマニラは世界的な都市へと変化していくのであった。

#### 【第二次世界大戦後】

第二次世界大戦の戦火により、ワルシャワに次ぐ壊滅的な被害を被ったマニラはその戦災復興策として都市計画事業が急速に進められた。しかし、都市計画に関する各種委員会、プロジェクトなどが発足し事業に当たったが、計画の実施に関わる各種機関との連携を十分持ちえず、また計画そのものも経済、環境、文化的側面との総合性がとれず、必要性を十分認識されないまま1972年のマルコス大統領による戒厳令を迎えてしまった。

マルコス政権においてはイメルダ大統領夫人の居住環境計画に対する強い関心から住宅、地域、都市計画、環境管理を総合的に行う人間居住省（Ministry of Human Settlement）が設置され、イメルダ婦人自ら大臣に就任している。しかし、階層的にも首都圏委員会、地方都市委員会といった全国的な機関が設置されたにもかかわらず、人材不足、政治的圧力、権限の過集中による不正の横行といった中で十分に機能を果たすことはなかった。又、不十分ながらマニラ全体の都市事業に関する取り組みが行われるなか、スペイン期からマニラの中心として存在していたイントラムロスは戦火を受けた後30年以上の間修復事業が行われなかった。しかし、1979年になってようやくマルコス大統領令によりイントラムロス行政局が創設され、イントラムロスの保全、開発、維持、管理を一元的に行う機関が設置された。

EDSA 革命を経てアキノ政権が誕生すると、マルコス政権では十分成し得なかった都市計画行政に大規模な組織改革が行われた。前大統領下で発足した省庁、委員会は廃止され、新たな機関が設置され住宅都市開発にあたった。アキノ政権後のラモス政権においてもこの路線を引き継いでいたがマルコス期からの懸案である人材・技術の蓄積が十分に解決されず現在に至っており、未だ都市計画行政は十分機能しているとはいえない状況である。

上記で概観した過程を経る中、アジアで最も民主主義が発達した国の一つであった戦後のフィリピン社会の地位は約50年の間に崩壊していき、今やアジアの「問題児」とさえ一部ではささやかれる状況でにまで陥った。この原因の一つとしては腐敗した政治体制とフィリピンの根幹をなす農業分野における農地改革の遅延が指摘されている。本研究では農業政策についての言及はしないが、その影響が都市貧困問題となり都市に住む人々に様々な制約をもたらしている。

以上本節では都市の変遷、そして近年における都市政策について、次章以下で考察する対象となる「盛り場」形成の一要因となる社会的背景を都市史の視点から記述した。

## 第2節 「盛り場」の定義

ここでは本論で詳細な考察をする「盛り場」についての概念を定義する。「盛り場」と聞いて連想されやすいものとしては歓楽街、風俗街など商業施設、娯楽施設からなる建築の密集状況と、その空間を支え「盛り場」の隆盛を誇示させる人口の密集状況という、二つの密集状況を必要不可欠な最低限の要素としている空間である。一方、「盛り場」では密集化を前提としつつ、匿名性という空間的要素に裏付けられる非日常的な不特定多数のドラマが演じられている。これが「盛り場」をどことなくいかかわしい幻想の縁に追いやる要因でもある。実際「盛り場」には昼夜それぞれの側面が存在し、そこに生きる者、訪れる者との交流の中で物語が織り成され、

表出していく。この水面下でのテクスト的な作業、そしてまさに紡ぎ出された結果現れてくる「盛り場」特有のダイナミズムが、ある種社会状況を縮図にした噴出口の一部を担うかの如く密接に社会と関係しあった空間を創出していると推察できる。本論で考察しようとしているのはまさにこの現象である。そこで「盛り場」を二つの密集状況と、そこ生きる大衆により紡ぎ出される物語の現場というように定義する。後者はいささか抽象的ではあるが、この曖昧さこそが「盛り場」を捉えずらくし、一方で興味をそそる根本原因でもあり、かつ「盛り場」に彩りを与える主要素でもある。その為、あえてこの曖昧さは残すことにより以下では特にフィリピンに限定した「盛り場」考察を試みる。

フィリピンを対象としたとき私たちの「日常」と大きく異なる要素は経済的に未発達な状況である。街には多くの大衆が溢れ、彼等の多くはいわゆる貧困層に属している。その数は多く見積もられると全人口の2/3とも言われているが正確な数値は定かではない。彼等の中には日雇いの労働者となる者もいれば、タバコ売り、新聞売りとして生計を立てている者もいる。彼らの多くは「盛り場」に繰り出し、わずかな富に「寄生<sup>5)</sup>」していくことにより生計を立てる手段を捜し求めている。

しかし、経済的弱者の立場から見た富裕層への一方的な「寄生」のルートだけでは両者の関係を説明することは不可能である。むしろ富裕層から貧困層への搾取とも思えるまなざしの中からも読み取るべき要素は存在し、こうした相関性のなかにこそ「盛り場」を生成する磁場が形作られている。

### 第3節 都市の多様性と「盛り場」の分布

本論で取り上げる「盛り場」の種類には二つのものがある。主に戦後から現代までのマニラの都市計画、都市形成の流れを踏まえて、本研究において考えることのできるものは以下の通りである。

- 1, スペイン統治期など古くから見られる教会を中心に形成される場所。また、戦後の大衆交通手段の象徴であるジープニーのターミナルを中心に形成される場所。両方とも万人に対して開かれた公共空間とも考えられる場所である マニラ中心部の「盛り場<sup>Pl.1)</sup>」
- 2, 戦後マニラが郊外に拡大するにつれ環線道路沿いに発達したショッピング・モール(SM)を中心に形成される場所。近代の消費社会の範疇に入ることのできた富裕層を中心に形成されている場所。 郊外型「盛り場<sup>Pl.2)</sup>」

上述の「盛り場」はマニラが持ち合わせる都市としての多様性の中に点在しており、上記の一般的な特質を内包しながらも地区ごとに個別の特徴が現れている。この特徴は「盛り場」形成の要素に変化を与えている。現地調査で得られた地区の様子は以下の通りである。

#### 【マラテ<sup>Pl.3)</sup>】

レメディオスサークルを中心に西洋風な街区を形成している。カフェ、バー等が点在し、お洒落な地区と言われている。一方でサークルに隣接する形でスラム街も存在し、貧富の差が同一地区内で見られる場所となっている。

#### 【エルミタ<sup>Pl.4)</sup>】

数年前まではディスコ、売春宿が多くあり風俗街であったがマニラ市長<sup>註8)</sup>の一斉摘発により現在は廃墟となった建物が数多く残っている。しかし、ロビンソンプラザや高級ホテルもあり、買い物や娯楽を楽しむ富裕層が集まる場所ともなっている。

#### 【イントラムロス<sup>Pl.5)</sup>】

城壁に囲まれた地域でスペイン時代の面影が残っている。サン・オーガスティン教会、マニラ大聖堂、サンティエゴ要塞といった観光場所もある。

#### 【チャイナタウン<sup>Pl.6)</sup>】

対象地区の中で最も人口密度が高く人々が溢れ返っていた。チャイナタウンを象徴するものはフィリピン・中国親善門、漢方薬店等で中国的な要素を表し、観光化されたチャイナタウンというよりも生活感溢れる地区である。

#### 【キアボ<sup>Pl.7)</sup>】

チャイナタウンと隣り合った地区。キアボ教会を中心にマーケットが点在する。中でもキンタマーケットは最も規模の大きなマーケットである。さらにこの地域は交通の要所となっており庶民の足であるジープニーが行き交い喧騒とした様相を呈している。

## 本論

### 第1章 「盛り場」の様子と空間構成

#### 第1節 教会周辺の事例

本節で検証していく事例は教会を中心に形成されている「盛り場」である。具体的な対象はマニラ大聖堂、キアボ教会である。教会はスペイン統治期より民衆の生活に大きく関わっている。特にマニラ大聖堂はイントラムロス内に位置している地理的特徴から歴

史的変遷に伴う「盛り場」の様子を多くの資料<sup>PL8</sup>から伺うことができる。

最初にマニラ大聖堂<sup>PL9</sup> (Manila Cathedral) 周辺の様子から考察する。イントラムロス内を彩る建築物は混沌としたマニラの町並みに唯一規則を与える街区を形成している。コロニアル建築が軒を並べるイントラムロスのメインストリート、ルナ通り (Luna St.) は宗主国スペインの町並みを想起するに十分である。しかし、その面影は第二次世界大戦で多くの歴史的建築物が破壊され、その後の経済的に不安定な社会状況から、今日ではかつての面影は由緒ある建築とトタン屋根の粗末な家屋が混在した状況の中にあるのみである。しかし、この新旧の重層的な混在がフィリピンでは自らのアイデンティティ形成の核として、植民地の歴史を不可欠な事実として内包しながらも新たな形で「未来へ投企 (清水 1998: 149)」する企てとなって現存していると考えられる側面もある。

マニラ大聖堂はマニラ・カトリック大司教の本拠とされている教会である。この地に教会が最初に造られたのは 1581 年であるが、その後度々破壊され、その都度に再建され今日に至っている。現在の建物は 1958 年にパチカンなどの援助を得て再建された 6 代目のものである。1571 年の植民地首都の制定以来マニラ大聖堂は都市の経過と共にマニラの変遷を見つけている。当初イントラムロスはスペイン人と混血層 (メスティーソ) のみの居住空間として他とは隔絶した存在であった。このイントラムロスのシンボリック的存在であったマニラ大聖堂の周辺には植民地政府の官庁が配され、政教施設が一極に集中した空間を形成していた。イントラムロスに代表される集住型の都市空間はその後地方に拡散し、16 世紀終盤に始まる村落統合政策を生み出し、宗教による原住民統治の装置としての役割を担っていった。約 3 世紀にわたるスペイン統治の代表的遺産である教会建築は、通常町の中心部に位置し、町で最大の建築物であることが多い。ポブラシオン<sup>PL10</sup> と呼ばれる町の中心にはほとんど例外なく教会があり、教会とプラザ (広場) を核として、町役場とマーケットが隣接し、それらを取り囲むように町の有力者の家々が並んでいる。植民地支配、改宗事業の中心的存在であった修道士や政庁官吏はさらに教会の周りの「鐘の音が聞こえる」範囲に周囲の人々を強制的に住まわせることにより中心的空間の創出に着手していった。この空間構造は今日でも広範に見られるポブラシオン パリオ (バランガイ) シティという行政構造に発展しており、「人口の集中の蜜から疎へという度合い」に応じて、中心となる町の磁場の引力と影響力の中に放射状に配置されたのである (Phelan 1959: 44)。

こうして形成された改宗と統治の象徴的装置としての教会を中心とした街区はスペイン統治期を通じて民衆の周密化とともに聖俗の中心地としての役割を担った。彼らは今日フィリピンの歴史を他のアジア諸国とは一線を画した遺産として享受し、自らのアイデンティティの核として認識している。これは英語の受容とともに語られるキリスト教の享受を「近隣アジア諸国との差異と誇りの徴 (清水 1998: 148)」として近代のナショナリズムの内実として構想されている。この起源はすでに民衆の集住化政策実施の初期から顕著に現れていたと推察できる。その理由はポブラシオンの中心で行われる宗教的儀礼や祭日は先住民を教化する絶好の機会であったと同時に、教会の壁一枚を隔ててプラザとの間でとりなされる聖なるものと世俗的なものの混在は周囲の人々を感化し、キリスト教への積極的な帰依を促し、民衆をカトリックの下に均質化させるに十分な象徴的祭事であったからだ。

約 3 世紀に及び上記のような教会を中心とした都市空間は今日に至っても尚存在し続けている。既に述べているマニラ大聖堂は、フィリピン国民の生活と密接に関わっているカトリックとその信者である国民の内面を結び付け、国民国家として歩み始めたばかりの国民の道しるべ的存在となっている。確かに総人口の大多数はカトリック教徒によって占められているが、ミサなどに常時出席するものは少数の熱心な信者に限られてしまう。また歴史的地区、建築物の管理が十分に行き届いていない状況を露呈されると敬虔な信仰とは程遠い偽物として誤解されたり、少なくとも宗主国の数だけ文化が存在する重層文化の「いいとこ取り」と見下され、フィリピン側の未消化や、うわべに限った物真似的な摂取として否定的な含意を持って語られる可能性もある。

今日のマニラ大聖堂前のローマプラザ (Plaza de Rome) に集う人々は多くが貧困層である。彼らが形成する「盛り場」は過去に同じ場所で形成された宗教色の強い「盛り場」とは程遠い姿である。多くは物乞いの対象を探す目的で集まっており、店を広げての商売や、歩きながらの商売に従事している。しかし、過去に統治、改宗政策のシンボルであったマニラ大聖堂の建物は、今日の不安定な国家経済の歪みに苦しむ大衆の内面にカトリックの精神世界、「救済者」としてのキリスト像、を共有させ、「盛り場」に人々を引き寄せる磁場を創り上げていると考えられる。

今日の教会を中心とした「盛り場」は貧困層の吹き溜まりとして下落した都市空間と認識される側面も持ち合わせているが、そこには脈々と受け継がれているカトリックの影響力が今日の救済のシンボルとして大衆の心象に働きかけている。

次にキアボ教会の周辺事例<sup>PL11</sup> を考察する。前述したマニラ大聖堂と比較して一層庶民感覚の溢れた場所に位置している。何よりも教会の周辺は多くの商業施設、市場、露天と大規模な人口を抱えている点でマニラの中でも一際人口密度の高い場所である。教会周辺の市場には多数の露天が軒を並べ、生活品、食料品を販売している。その横で白昼にも関わらず自分の娘を売春させる女性の姿も数多く見受けられる。キアボ教会の厳粛な宗教儀礼と周辺の人々の粗末な生活ぶりはキアボ教会を核とした中心空間が教会に集まる富裕層とその周辺に暮らす貧困層とのコントラストによって支えられている点と対比している。ここでも「聖」と「俗」の対比が教会の求心力によって形成されている。

キアボ教会の特徴として見られる貧困層の商売方法は、教会に集まるわずかな富裕層に集中する形で成立している。両層に見られる関係は経済的弱者から強者への「寄生」行為として終始されるのではなく、強者からの搾取、制裁の結果表出してきた行為の末端部分における噴出口の一部に過ぎないのではないか。無視することが不可能な両者の関係は近代化の過程を経る中で生じた都市の貧困問題と絡み合ったものであるが、同時に、マニラの下町に位置するキアボ教会においては、近代の都市が機能性と効率性を求めて形成され、イデオロギー装置としての機能が省かれたデザインを有する傾向にある中、多くのフィリピン国民に共通して認識されているカトリックの影響、シンボル化したブラック・ナザレ<sup>9</sup>の救世主像、を継承し、貧富の差に関わらず民衆を寄せ付ける何らかの磁場を形成していると考えられる。この磁場形成が富裕層と貧困層が織り成す特別な関係を支えるものとなっている。

## 第2節 ジープニーターミナルの事例

今回調査した地区の一つであるディヴィソリアは露店と大衆によって身動きが自由に取れないまでに膨れ上がった混沌とした場所であった。教会周辺の事例と同様に貧富の差はここでも見受けられたが新たな要素としてジープニーが登場してくる。ある種祝祭空間のような様相を呈している地点にジープニーが我が物顔で登場してくる光景は都市の建築、人、モノを記号としてとらえ、都市空間を舞台としたテキスト論的記号論<sup>10</sup>の視点から考察すると一つの記号として浮かび上がってくる。しかし、私が着目したことは記号論からのアプローチではなくこのような場所に無理やり押し入ってくるジープニードライバーが余儀なくされた状況であり、社会的制約から見た地平である。この視点の考察は次章で行うことにして以降ではジープニーの基本的な説明をする。

ジープニー<sup>11</sup>とは第2次世界大戦時、アメリカ軍によって利用された輸送手段の一つであるジープを改良したものである。アメリカ軍は終戦を迎えると倉庫に大量に格納されたり、路上に乗り捨てられたままのジープの処分に困っていた。一方、戦時中、大量の輸送手段を失ったフィリピンは代わりとなる輸送手段を探すことに困っていた。こうした双方の要求が相まってアメリカ軍のジープはジープニーとして生まれ変わり今日ではフィリピン文化の代表的存在となっている。

ジープニーは最も安価な交通手段としてフィリピン全土に普及していった。マニラ首都圏に限っただけでもその数は27000台と推測されている。近代化とともに増産され消費されているジープニーは大衆に親しまれていると同時に都市のひとつの機能として「盛り場」を複雑にする構成要素に組み込まれている。

ジープニーの営業種類には次の2種類がある。自家用とPUJ (Public Utility Jeep) である。PUJは登録制で一日70ペソの営業免許を取得する必要がある。また、PUJの営業形態は次章で指摘する雇用関係における「寄生」行為の考察とも関連してくる。

料金<sup>12</sup>の支払い方法は助手席の隣、又は運転手の後ろに座った人が暗黙の了解で集金係になる。座席に座った客はお金を手渡しで隣の客へ渡し、最終的には運転手のもとへ届けてもらうシステムである。重要な金銭授受がこのような曖昧な形で行われていながらも乗客は律儀に支払いを済ませているあたりはフィリピン文化の解釈の難しさに拍車をかける一要素である。

ジープニーはフィリピン文化の日常に入り込んで、今や大衆にとって不可欠な交通手段である。ジープニー運転手になることは就業の機会を獲得すると同時に、他の人との差異化の役割を果たすくらい特異なことである。彼らのジープニーに対する情熱はその装飾に現れている。それぞれの個性を主張するデザインは多くが寄せ集めの部品であるが、まさに「オリジナル」の商品となり大衆に迫ってくるのである。

## 第3節 郊外型ショッピングモールの事例

本節では戦後マニラの人口が拡大するに伴い、都市が郊外に発達する過程で出現したショッピングモールについて、その経済の二極化と関連させながら考察する。

郊外型ショッピングモールの典型的な例として考えることができるのはSM (シューマート：華僑系商人ヘンリー・シー創業) シティーやメガモールである。アメリカ型郊外ショッピング・スクウェアのコンセプトをそのまま移植したショッピングモールはその他にもクバオのアリモール、メガモールと隣接したロビンソンガレリアやシャングリラプラザがある。フィリピン政府・統計局の調べによる一世帯あたりの平均年収が12,381ペソとかなり低いことを考慮すると、ショッピングモールに密集する人々の光景は予想し難い。しかし、郊外型のショッピングモールが成功をおさめたのは、フィリピン国内における富の不均衡がもたらした遺産とでもいべき、一部の階層に限られた特権的社会状況の影響である。戦後の民主化の流れの中で、マニラを中心から周辺へと生活区域を変えていった人々は経済の二極化がもたらす貧困層と自らを差異化する目的のためではないだろうか。郊外型ショッピングモールが富裕層に独占され、貧困層が隔離された空間にいることを余儀無くされている現状は、近代消費社会の恩恵を受けることが許された富裕層による抑圧的な空間を構成している。

ここに生じた新しいタイプの「盛り場」は前述してきた教会、ジープニーのターミナル周辺事例と異なり、一部の階層に開かれた共同体とはいえないだろうか。ショッピングモールに集まる「消費者」となった富裕層は、「消費する」目的によって自らの行為を補

完している点において均一である。一方で前述してきた2つの「盛り場」には貧富の差を問わず大衆が詰め掛けており、その目的も多義にわたる点で公共空間としても捉えることのできる可能性を持っている。

確かに両者には「盛り場」構成上で大きな相違が見られる。しかし、新しくショッピングモールが成功を遂げた背景にある消費文化と大衆の結びつきはマニラの経済的な成長の裏づけともいえる。

## 小結

本章では3つの「盛り場」について考察してきた。どれもが既述してある「盛り場」の定義と逸脱していないまでも、その空間構成、形成過程には相異点が存在する。

教会を中心に形成された「盛り場」は、スペイン植民以来のカトリックの歴史を背景に救世主としてのキリストを心象に描きながら教会を訪れる人々によって維持されている。教会とプラザの関係は教会内外の聖俗、貧富の対立を生み出しつつも、両者がそれぞれの目的で混在し、互いに交流している点で捕らえ難い混沌とした磁場を生み出している。

ジープニーのターミナルにみられる「盛り場」は祭事空間と酷似した喧騒空間を生み出、街路では人々が商売をしている。モノはもちろん身体ですら商品と化し、訪れる富裕層に自らを寄生している。またこの場所で特徴的なジープニーの乱暴な運転はそれを都市の記号として見る以上に、その行為を生み出す社会的ヒエラルキーの存在の着目に誘った。ここでのヒエラルキーは貧富の差を土台とした雇用関係にまで発展する。「盛り場」研究が表層的なモノ、人の抽出に終始する危険性を回避する上でも「盛り場」に集まる原動力となるものの可能性については次章で考察する。

最後に郊外型ショッピングモールを考察した。多国籍企業のファーストフードがフィリピン各地に拡散していく過程は、マニラ郊外のショッピングモールの発展と一致する。近代化の流れの中で生まれた消費社会はフィリピンに富をもたらす一方で、経済の二極化を招いた。ショッピングモールが一部の富裕層によって賑わいを見せている状況は「都市貧困問題が近代化の過程で生まれた（森 2001: 157）」ことを露呈している。そこにみられる「盛り場」の構造は近年現れた新たな「盛り場」として考察できる。

## 第2章 多様化する「盛り場」にみる都市の姿

### 第1節 貧困と都市

フィリピンはスペイン、アメリカによる統治後、20世紀半ばから完全な独立国家としての道を歩み始めた。マニラでは高層建築が建ち始め、まさに近代を象徴した光景に溢れている。一方で、社会の両極化が進み、貧富の差が顕著となりそれは世界でも有数のものとなっている。都市を取り巻く状況も、一部の近代建築、商業施設を除いては老朽化が進み、またスラム街との隣接地域もあり衛生的にも悪い状況<sup>13</sup>である。

このような状況下、一つの「盛り場」の中でさえ富裕層と貧困層とが混在しており、「盛り場」を形成する要素も多義にわたっている。同じ場所でも両者はそれぞれの理由から「盛り場」に集まって来ており、そのコントラストが今日の「盛り場」、都市の特徴となって現れている。そこには近代的な貧民の姿、つまり裕福な者との対極に位置し、社会にとって負の存在として位置付けられている姿、があり中世まで社会システムの中に取り入れられていた貧困者の救済は無くなっているように思われる。

では都市の貧困問題が著しいマニラには貧困層に属する人々はどの程度いるのであろうか。まず、貧困層をカテゴリー化する「貧困線<sup>12</sup>」の存在について述べておく。これは「明白な最低限の必要を満たす能力を基準にして測定することができる（カリヤンダ：18）」ものである。つまり生活する為に必要最低限のモノを購入する金銭を得る能力である。しかし、最低限の必要とは個人による認識差、地域差、その他様々な要素によって統一したデータとして集積されないことが多い。そのため貧困線下にいるフィリピン全体の貧困層の割合は45%から64.3%と大きな差が生じている。またこの割合に乗じてインフォーマル・セクター<sup>13</sup>の存在を考慮すれば64.3%という数字も決して大きなものではないことは容易に想像がつく。正確な貧困率が把握できない現状ではあるがそれは社会システム、経済の不安定要素によって導き出される結果である。

仮に人口の60%が貧困層に属する人々であると仮定する。すると私が行った「盛り場」調査で出会った人々のほとんどが貧困者であったことになる。貧困層に属する職業上の色分け、つまり貧困集団の代表的なものには以下のようなものがある。物売り<sup>14</sup>と行商<sup>15</sup>くず拾い、都市労働者<sup>15</sup>である。彼らの存在はマニラの街を歩くとき日常の光景として目に入るものであり、「盛り場」のフィールドワークをしている最中最も多く接する人々であった。しかし、ここで確認しておきたいことはマニラの「盛り場」がスラムやスクウォッター（不法占拠区域）と同一視される空間かということ、それとも異なる事実である。「盛り場」を形成する人々、モノを単に記号としてみると貧しいイメージと代替することも可能であろう。しかし、「盛り場」にはその他の記号も存在する。貧困層の集住区域と異なり、中流階級、富裕層も集まる「場」。つまり、不特定の要素によって形成され、人々が匿名性の中で存在しあう「P人」と「人」との間（斎藤 2000: 5）」が重要視される空間なのである。この空間の存在意義は貧困層の側面から見ると金銭を獲得する場（行商や



露天商は合法手段ではないが)として、富裕層から見れば信仰上、娯楽空間等多目的な「場」としての意味がある。ここで貧困層と富裕層とに二極化してしまったが、勿論両層に分けられない人々にとっての「盛り場」も存在し、その多様な空間を補完し合っている。

マニラは周辺農村から流入してきた貧困層によって溢れ返っている。貧困都市ともいえる状況である。この状況を打開するには農村問題からの抜本的な社会状況の変革が必要とされているが、その望みは戦後継続的に絶たれている。マニラの街には貧困に代表される都市の問題点が出ている。「盛り場」に限らずこういった問題を語る上で貧困問題は不可欠な要素である。全ての問題が貧困と関わりあっているのではないかというネガティブな予測をしてしまうほどである。現状の生活に十分な幸福を得られない中に暮らしている人々もいれば、彼らを搾取する側の人たちもいる。しかし、一部の富を排除することに問題解決の糸口はない。なぜなら「盛り場」という公共空間を通じて人々の交流が良かれ悪しかれ行われているからである。マニラの「盛り場」は単なる猥雑な空間ではない。環境の異なる多様な人々が交わることのできる空間として「盛り場」は大衆に開かれており、また、だからこそ捉え難く、定義し難い空間としての皮肉な不確定要素を持ち合わせているのである。

## 第2節 「盛り場」の共通項

前節から記述しているとおり「盛り場」とはあらゆる他者の行き交う匿名的な空間である。特にマニラの場合は貧困問題が根本にあり貧困層と、富裕層の両層による寄生、依存、搾取の関係が現れている。

教会周辺に見られる「盛り場」の形成を見てみると中心から周辺に行くに従い、聖から俗への移行が見られる。一部の敬虔なカトリック信者に群がる形で行商、もの売りをする貧困層はあたかも一部の富に「寄生」していくようである。一方、教会周辺で行われている売春行為はいわゆる「買う」者がいるから成立する行為である。私が調査したキアボ地区では一晩に多い日で3人の男性と性行為を持つという話を聞いた。その額は300ペソが相場であり、単純に計算して一日の収入は900ペソ。1985年の司教・実業家会議(BBC)が行った調査による貧困線が月収1500ペソという結果を時代の推移も加味して考慮したとしても彼女たちが一晩で稼ぐ金額は相当のものである。経済的弱者から強者への「寄生」とその逆の「搾取」には相関性があり、人権、道德面のみを考慮した見解も、経済的弱者の側に立つと抑圧的な行為とみなされる危険性もある。売春は貧困層と富裕層の関係を考えるのに顕著な問題提起をしているが、他の貧困集団でも同様な関係があることが予測される。

ジープニーのターミナルを中心に形成されるジープニーをめぐる大衆の密集化も「盛り場」に特徴的な光景である一つの「寄生」行為である。ラッシュアワーの時間帯を中心にジープニーに群がる光景を見るとあたかも一つの餌に向かって群がる蟻のようである。私はこの光景からも「寄生」という概念を想像した。この概念は何らかの利益を求めて群がる行為を指し示しているが、これをジープニーに群がる大衆に転用して考えるとどうであろうか。確かに、最も安い交通手段であるジープニーは国民の半数以上が貧困層に属するフィリピン社会の状況を考慮した際、最も適当なものである。しかし、この需要をもとに大衆からジープニーへと向けられた「寄生」行為はジープニー(運転手)と大衆の関係はどちらもブルジョワジー以下によるもので両者の間に経済的強格差はそれほど顕著に生じていない。一方、ジープニー、特にジープニー運転手、からその元締め(富裕層)となる営業者に向けられた「寄生」行為があることも事実である。むしろこの概念が有する本来の意味を考えると、ジープニー運転手として就業し、賃金を得るこの行為こそ、雇用機会創出の一部に加わり恩恵をこうむっている点で「寄生」という概念に裏付けられたものではなからうか。前章で少し触れたPUJ(public Utility Jeep)は完全な雇用関係の下に生まれたジープニーの営業種類である。ジープニー運転手は貧困層に属する都市労働者(運転手、配管工、電気技師など)である。確かに、行商、露天商と比較すると技術を持った労働者として都市貧困者のなかでも50%以上の割合を占める有力層であると考えられるが、彼らの場合は雇用者となるホワイトカラーとの連鎖の中で「寄生」と「搾取」の関係が成立している。フィリピンにおいて就業機会を得ることの困難な状況が持ち出した現象は、街路へ出た行商であった。この行為は合法とみなされたものでなく、常に取り締まりの恐怖と背中合わせにある。一方で雇用機会に恵まれることは収入を得る手段としては安定したものであり、この雇用機会に対して人々は「寄生」していく。雇用者となる富裕層はジープニーの社会的需要と就業機会を探る貧困層の需要とに付け入り安価な労働力を得ている。この構造に巻き込まれる形となったジープニーの運転手は富裕層との雇用関係の成立のために客集めを目的とした、乱暴な運転、「盛り場」への無理な侵入といった交通問題にも発展している状況を引き起こさざるを得ない状況に陥っている。これがある種の「搾取」から生まれたジープニー運転手の行動である。

後者の「寄生」行為を考えるとジープニーを媒体として引き起こされる様々な状況に示唆的な証拠を付与することができる。ジープニーのターミナルに見られるこのようなジープニー運転手と大衆との相互補完的な構造は、戦後の私生児であるジープニーとともにフィリピン社会が歩んできたほんの半世紀の歴史、社会構造を投影した形となって顕在化していると考えられる。

郊外のショッピングモールに見られる「盛り場」では両層の顕著な対比関係を見ることは出来ない。むしろここで見られることといたら消費社会・文化に対する富裕層の「寄生」行為であろう。しかし、既述した「寄生」と「搾取」の関係とは完全に種類を異に

する。その為に本論では比較の対象とはしないが、「盛り場」のサンプルの一つとして触れた。

### 第3節 寄生空間としての「盛り場」

前節に触れた「寄生」行為は、貧困問題を拠点として発生するマニラ特有の形と言えよう。「盛り場」は大衆・建築・モノの密集状況によって支えられており、都市形成に必要な不可欠な要素である。また「盛り場」の公共空間としての可能性は、不特定多数の人間を行き交わせ、交流しあうことの出来る空間としての装置を創り出してきた。これらの前提条件とフィリピンの経済状況とがぶつかり合い、「盛り場」をフィルターとして「寄生」と「搾取」の相関し合う対立構造を噴出させてきた。こうした「寄生」と「搾取」の二つの要素の衝突は、宗教空間、祭事空間、消費空間でもある「盛り場」に生まれたのである。

そもそも「寄生」という言葉の生物学的な意味は「栄養取得に成功し、自己増殖してその生活環をまっとう出来る場合であり、同時に病原体と感受体に親和性のあることが必要で遺伝的相互作用により決定される。(加藤 1987: 239)」ことである。つまり「寄生」とは病原体が延命していく手段のひとつであり、その行為は感受体との遺伝的相互性によって補完されていることである。やや飛躍的になるが、「盛り場」で発生する「寄生」も貧困層による金銭の獲得手段の一つであり、富裕層からの「搾取」から逃れられないのも一種の強制された不可避な状況に押しこまれているからではないか。ここでも両層による「寄生」が問題視され単に経済力のない者から強者への「寄生」のみが存在するのではなく、より厳しい積極的な甘受を伴う経済的強者から弱者への「搾取」といえる「寄生」が存在する。「盛り場」にはこのような関係が溢れている。これは社会の闇であり、これらの問題は水面下で交渉の進む出来事である。この潜在性は「盛り場」で織り成される生成の磁場であり、その結果顕在化してくることは売春婦、露天商、行商人のような記号としての存在である。彼らは「盛り場」を舞台に生活する役者として「盛り場」に多様性を与える一面もあれば、彼らの存在が社会問題との関連の中で問題視され、潜在的に「盛り場」を複雑化させる二面性を持つ。しかし、staticに都市を眺めるよりもむしろ後者のようなアプローチの仕方。「盛り場」を人々の生活、社会問題と付き合わせた関係からみる dynamic な視座が必要であると考えている。この意味でマニラの「盛り場」は貧困問題を核とする人々の「寄生」意識に基づいて「盛り場」を考察する一手段を提供してくれている。

### 小結

本章では前章の具体事例を受け、フィリピンの貧困問題と関連させてながら「盛り場」を捉え直してみた。その結果フィリピン社会を特徴付ける貧困問題が都市の末端まで波及しており、その様子は建築物の老朽化はもちろん、人々の生活にまで廃頹ムードを蔓延させていた。しかし、多様性の名のもとに語られるフィリピン文化の特異性は、「盛り場」形成にもその影響を色濃く映し出している。「盛り場」とはあらゆる属性のもとに開かれる場所性を有する都市の構成要素の一つである。経済的な強者、弱者を問題とせず「盛り場」に集まることには可能性とも換言できる磁場がある。それは宗教的には慈悲を求めるものであり、経済的には富を求めるものである。確かに「盛り場」で繰り広げられる出来事には非合法的な問題、人権上の問題が数多く存在する。これらは決して見過ごしてはいけない危険因子であるが、これらが一掃されると社会の下層で生きる人々にとっての生活区がなくなる危険性も孕んでいる。「盛り場」は犯罪の温床となる可能性を大いに秘めた空間である。しかし、貧困者にとっては富裕層を探し「寄生」していく機会を提供してくれる空間でもある。私たちの日常では想像し難い貧困層と富裕層の間に起こる「寄生」の連鎖は大部分に「搾取」という実態を孕んで現れてくる。この問題を一つの結論に帰結させることはその行為自体の持つ抑圧的な態度の存在から、明確な形で言及することはできないが、「盛り場」において両層の「寄生」行為が行われている事実、そしてこの事実を補完するだけの不確定な多様性に導かれる階層を無くした人々の匿名的な交流が「盛り場」において行われていることはフィリピンの社会問題が「盛り場」にある/いるものを通して表出化される結果をもたらしている。

### 結論

本研究では諸問題を表出化するフィルター機能としての「盛り場」の役割に着目してみた。分析手段としては都市研究者が1980年代頻繁に行っていた記号論を用いたアプローチによらず、都市社会学の嚆矢となるシカゴ学派による都市研究、社会集団のライフスタイル、人々の交流の様子を含めた研究、に近いアプローチを取った。それは都市研究の分野においても記号、つまりモノ自体に直接する在り方では行き詰まりを見せている昨今の状況を打開する結果となった吉見の研究に起因する。

本研究では当初の問題を考察するために「盛り場」の調査を行った。それぞれ教会、交通の要所、商業施設を核として形成される場所であった。そこには人口、建築物の密集状況が不可欠な条件としてあり、大衆の交流の場として機能する「盛り場」があった。交流の仕方はマニラの貧困状況に裏打ちされた経済的弱者から強者への富を求めた「寄生」であった。しかし、この現象は不可逆なものではなく、経済的強者から弱者への「搾取」を伴う抑圧的な「寄生」行為も存在した。この関係はキアボ教会周辺の売春婦を通

して考察した。

「盛り場」に見られる貧困層と富裕層における「寄生」の構造はその関係が孕む危険性をもちながらも、社会的状況から考慮すると不可避なものである。両層の関係は、皮肉であり、矛盾を伴うが、「盛り場」特有の開かれた匿名的な空間性により、人々との交流の中で補完し合い、支えられているものである。

本研究では「盛り場」の持つフィルターとしての機能を通して、貧困問題を伴った形で都市の姿を考察することができた。そして、都市という空間に表出してきたモノの間には人々に縋って生きていくことを余儀なくされた階層の人たちによる寄生行為があることを取り上げた。しかし、「寄生」という概念から生じる問題は依然として危惧される側面を持ち、更なる研究、考察が必要であることは否めない。都市の成長が社会の状況と密接に関わりあうことは都市が社会の産物であることの証であろう。しかし、都市を見つめる視線を表面的なモノに集中させることは、潜在的な社会性との関連を無視した行為といえる。確かなことはモノを介して理解することであり、単に記号化したモノを列記し、珍重することではない。都市が抱える問題点は数多く指摘されるが、その目に見えない潜在性にこそ危険因子がある。この因子を可視化し、社会との関わりの範疇において都市を理解していくフィルターとなる「盛り場」は都市を見つめる一つの切り口を提供する貴重な場所であった。

## 註

- 1 記号論とは、記号がどのように生成され、意味付けられ、流通し、消費されるのかを分析する方法論として認知された(2001: p. 212)。K・リンチが準備したテキスト化される都市へのまなざしはR・バルトを經由し、1980年代における横断的な都市記号論の興隆につながっていく。
- 2 1960年代以降ヨーロッパで誕生した都市論の一つ。単体、逸品主義の建築史から街区の全体的な考察を行うと同時に、都市を織物と考える基本的な理念を育てた。コンテクスチュアリズムの日本への導入は陣内秀信によってもたらされ、70年代を中心に様々な可能性が模索された。
- 3 マニラ都市年表  

西暦	主な出来事
982	フィリピン諸島が「モ・イ」として中国の史書『文献通考』に登場
1521	マゼラン隊、サマル島に到着
1565	レガスピ遠征隊、セブ島に到着
1571	レガスピ隊マニラを占拠
1581	アントニオ・セデーニョマニラ赴任。市の最初の建築家となる
1590	ゴメス・ペレス・ダスマリニャス総督、マニラの建築事業を継承する。
1603	マニラで最初の中国人反乱
1607	サン・アグスティン教会完成
1762	マニラ、英軍に占領される
19C	反スペイン運動が起こる
1898	マニラ湾会戦。米軍、スペイン艦隊を撃沈
1941	太平洋戦争勃発
1942	日本軍、マニラ占領(～1945)
1946	米国から独立。ロハス大統領に就任
1965	マルコス大統領就任(～81)
1972	マルコス戒厳令を布告
1975	マニラ首都圏成立
1986	ピープルパワー革命。コラソン・アキノ大統領就任
- 4 1573年にスペインの全植民地を対象として都市の位置選定、公共施設配置、街路計画、教会と広場の位置等に関する標準都市計画勅令が発布されている。
- 5 中国人海賊リム・アホンによる1577年、1579年、1583年の侵攻、1762年から1764年にかけてのイギリスによるマニラ包囲、占拠によりイントラムロスの破壊だけではなく、美術品の盗難にもあっている。
- 6 アメリカ統治下のフィリピンでは1901年の民政以降、次第にフィリピン人の自治権が拡大し、1907年にはフィリピン人によるフィリピン議会が開設された。フィリピン議会はアメリカ当局と折衝を重ね、1916年にはジョーンズ法により、フィリピン独立の方針が明記された。さらに1933年のヘア＝ホーズ＝カッピング法、および、1934年のタイディングス＝マックダフィ法により、10年間の準備期間であるコモンウェルス期を経てフィリピン独立を承認した。
- 7 ここでいう「寄生」とは生物学上定義される「寄生」から連想されるものである。その定義では従属栄養により生活する植物病原菌がある植物体のもつ防衛機構に打ち勝って、栄養取得に成功し、自己増殖してその生活環を全うできる場合を寄生としている。寄生が成立するためには、病原体と感受体の間に親和性のあることが必要で、この親和性は遺伝的相互作用により決定されている。尚、寄生の種類は 純寄生：生きている宿主細胞から栄養をとり、宿主からは独立して生存できない。 条件的寄生：宿主細胞を殺し、死細胞から栄養を摂る。 条件的腐生：植物体の死滅細胞で繁殖し、弱った生組織をも侵害する。 腐生：寄生しないこと、とに分けられている。

- 8 1992年にマニラ市長に当選したアルフレッド・リムはマビニ通り、デルピラール通りに面した歓楽街をはじめマニラ市内全域の風俗店を営業停止にした。しかし、多くの風俗店はマニラ市の南に位置するパサイ市に店舗を移し営業を続けている。
- 9 キアボ教会に安置されている「ブラック・ナザレ」と呼ばれる木製の黒いキリスト像。毎年1月9日は「ブラック・ナザレの祭り」が行われる。十字架と聖像が山車に乗せられて町を練り歩き、教会周辺はたいいんな賑わいとなる。
- 10 「有用性の機軸 行政・生産・交通・交換」を中心に、都市を構成している個々の要素を分割し、統合していく、それまでの分析手法に対して、むしろ有用性のネットワークからはみ出す部分、そこに生きる人間の気分や欲望の感光板として表れる都市の深層的な部分を記号論的に解読する方法を提起した(前田 1984: 7)。」点で、これらの都市論のアプローチは記号論的ないしテキスト論である。
- 11 1960 10 センタボ  
 1972 15 センタボ  
 1978 30 センタボ  
 1979 45 センタボ  
 1984 1 ペソ  
 1991 2.5 ペソ  
 2002 4 ペソ  
 cf) 100 センタボ = 1 ペソ  
 1 ペソ = 約 14 円(1989)  
 = 約 2.5 円(2002)
- 12 6人世帯の貧困線 (Abrera: 1991)
- | 年    | 農村    | 都市    | マニラ   | フィリピン |
|------|-------|-------|-------|-------|
| 1971 | 3,000 | 3,428 | 4,284 | 3,570 |
| 1975 | 5,201 | 5,943 | 7,123 | 6,089 |
- (ペソ)
- 13 地下経済、アングラマネーで営まれる経済活動によって得られるお金。タイプ別に分類すると 犯罪行為によるもの：汚職、賄賂、売春、麻薬など。経済的弱者によるインフォーマルな経済活動：ストリートベンダー、サリサリ・ストアのオーナー、零細規模下請け業者の営業活動など。効率の悪い正規取引に応ずるインフォーマルな経済活動：ドルの闇取引、スマッグリングなど。参考84年のGNPに占めるインフォーマル・セクターの比率は47%と換算されていた。
- 14 物売りの分類。商品を運びながらあちこち動く行商人や歩道の物売り。ある程度決まった場所であり動きにくい行商人歩道や道端で、デパートあるいは教会や市場のあるところで商品をしばしば壁に吊るしている。同じ場所を動かない行商人市場周辺のキオスク、商業地域の道端や空き地で売る。
- 15 都市貧困社層の約50%は運転手、配管工、電気技師、塗装工、大工などの熟練労働者で、支配人、販売員、事務員といったホワイト・カラー労働者の割合は少ない。また残りの大部分は港湾労働者、守衛、「ペオン」、召し使い、工場の日雇い労働者といった未熟練労働者である。

## 文献目録

五十嵐太郎

1996 「Weaving the City as Inter-text 都市=テキスト論から都市テキスト=論へ」、『建築文化』1996年2月号: 48-56

2000 「90年代の建築/都市計画の文献をめぐって」,メディア・デザイン研究所編

『10+1 都市/建築クロニカル1999-2000』,INAX出版: 112-115

ヴァレリオ・ノフェンテ

1992 「ジブニー」,寺見元恵編『フィリピンの大衆文化』: 174-195, めこん

小野俊太郎

2001 「記号論」,吉見俊哉編『知の教科書 カルチュラル・スタディーズ』: 212-213, 講義社

加藤 肇

1989 「寄生」,日本微生物学協会編『微生物学辞典』: 239, 技報社出版

川上洋司,名倉重晴,根本敏則

1999 「フィリピンにおける都市の整備と都市計画」,日本都市計画学会九州支部編『アジアの都市計画』: 93-113, 九州大学出版会

榊原芳雄

1994 『フィリピン経済入門』,日本評論社

カリヤンタ, R・S

1991 『フィリピンの貧困』,徳永俊明監修,駒澤大学第三世界研究会訳

神崎宣武

1993 『盛り場の民俗史』,岩波新書

小池あきら

1994 『フィリピン 裏町探検隊』,トラベルジャーナル

斎藤純一

2000 『公共性』, 岩波書店

サラゴーサ, ラモン・マリア

1996 『マニラ都市の歴史』, 西村幸夫監修, 城所哲夫・木田健一訳, 学芸出版社

清水 展

1998 『植民地支配の歴史を越えて 未来への投企としてのフィリピン・ナショナリズム』, 西川長夫・山口幸二・渡辺公三編 『アジアの多文化社会と国民国家』: 148-171, 人文書院

1999 『マニラ近郊町における聖週間の儀礼空間 キリスト受難の追体験をめぐって』友杉考編 『アジア都市の諸相 比較都市論にむけて』: 248-289, 同文館

陣内秀信

1993 『都市と人間』, 岩波書店

鈴木静夫

1997 『物語フィリピンの歴史』, 中公新書

瀬谷 肇

2002 『週刊朝日百科 世界100都市 ここに行きたい 第45号 フィリピン』, 朝日新聞社田島則行

2002 『都市と建築をめぐるフィールドワーク』, INAX出版

中西 徹

1991 『スラムの経済学 フィリピンにおける都市インフォーマル部門』, 東京大学出版部

成実弘至

2001 『シカゴ学派の都市社会学』, 吉見俊哉編 『知の教科書 カルチュラル・スタディーズ』: 223, 講談社

ノラコス, シンシア・D

1994 『フィリピンの都市下層社会』, アジア社会セミナー訳, 明石書店

森 常治

2001 『都市・記号の肖像』, 早稲田大学出版部

吉見俊哉

1987 『都市のドラマトウルギ - 東京・盛り場の社会史 -』, 弘文堂

Abrera, Ma. Alcestic

1976 Philippine Poverty Thresholds Development Academy of the Philippines

Phelan, John Leddy

1959 The Hispanization of the Philippines, Medison, The Univ. of Wisconsin Press.